

恐ろしいのは震災が初めからなかったことにされること

災害の記憶 伝えるバトン

災害の記憶を語り継ぐ「語り部」の意義や課題などを話し合う「第2回全国被災地語り部シンポジウム in 西日本」が26日、淡路市で始まった。全国の被災地で語り部を担うボランティアらが集い、記憶の風化を防いで将来の災害に生かす方法などを議論した。

淡路で被災地語り部シンポ



シンポジウムで被災体験の継承などについて話し合う語り部たち。淡路市の県立淡路夢舞台国際会議場

南三陸町 遺構巡るバス運行 北淡震災記念公園 防災学習で注目

メイン会場の県立淡路夢舞台国際会議場では、各地の語り部がそれぞれの体験や活動について語った。

東日本大震災の被災地・宮城県南三陸町の自治会長の伊藤俊さんは、津波に襲われた町の防災対策庁舎などを巡る「語り部バス」で体験を伝える取り組みを紹介。 「風化が当たり前のよう言われるが、それよりも恐ろしいのは震災が初めからなかったことにされること。自分の体験を語ることで教訓が広がれば」と語った。

阪神・淡路大震災で生じた野島断層を保存する北淡震災記念公園の語り部ボランティア、米山正幸さんは「開園当時は珍しい断層を見に訪れる人が多かったが、今は防災学習のために来客が多く、語り部の予約も増えている」と説明。震災から22年が過ぎ、震災後生まれの人が増えていく中、「震災を体験していなくても語り部はできる。語り部から学び、聞いたことを伝えてもらうのが我々の願い」と話した。

南三陸町で「語り部バス」を運行する南三陸ホテル観光のおかみ、阿部薫子さんは教訓をさらに広く伝えるため、被災地を訪れた見学者に、語り部から聞いた話を地元に戻ってから周りに伝えてもらう「第二の語り部」の大切さを訴えた。

シンポには全国から約430人が参加。27日は神戸市や淡路島の被災地を巡り語り部の話を聞く予定。（古田博行）

2017/2/27【朝日新聞】
災害の記憶 伝えるバトン